

1. 語句の意味的解釈

まず、「成人」について、言葉の意味を確認しておきたい。成人とは、「①幼い者が成長すること。また、その人。②成年に達すること。おとな。現在、日本では男女とも満20歳以上をいう。」(『広辞苑第6版』)となっている。下線の部分の「成長」をさらに調べてみると、「育って大きくなること。育って成熟すること。」では「成熟」とは、「穀物や果物などが十分にみのること。また、人間の体や心が十分に成育すること。物事が最も充実した時期に達すること。」と定義されている。

成人の意味は、それぞれによって種々の解釈ができるが、筆者としては、「人間の体や心が十分に成育すること」、「物事が最も充実した時期に達すること」という意味でとらえ、その視点で成人について思索してみたい。

2. 現代社会におけるライフサイクルと人生観

近年さまざまな分野で物事は細分化、専門分化している。現代社会に生きる我々は社会や人間を全体的に語ることをしなくなり、部分的にあるいは即物的にとらえることが少なくない。このような視点は、日常生活で直面する諸々の事象に対しても例外ではない。競争原理を重視する社会においては、何事にも効率的、効果的、即効性を重視する考えが存在する。

人の一生や自分自身の人生、また自己存在の意義をどのように考え、それをもとにいかにかに人生を主体的に生きていくのかは重要な事柄である。

生物学的にみると人の一生は「誕生」「成長期」「生殖期」「後生期」に分けることができる。これを人間のライフサイクルにあてはめて考えると、「誕生→子ども→大人→老人→死」ということになる。

現在の日本は世界に誇る「長寿社会」である。古来より長生きは人々の悲願でもあった。それがある程度可能となったわが国では、「人生80年」と言われるように平均寿命が延び、高齢期の期間が長くなっている。もちろん、人間の一生、人生は人によって様々であり、誰一人同じではない。個々によって寿命も異なる。その人生の道中にはさまざまな節目があるが、昔のように「還暦後は余生」という言葉では片づけられない時代なのである。長寿での加齢に伴う身体機能の変化だけではなく、ひと昔、ふた昔前と現在では人々のライフスタイルも大きく変容している。わが国の産業構造の変化に伴い、「晩婚化」、「核家族化」、「夫婦共働き」、「少子化」といわれる社会なのである(『厚生労働白書』平成26年版)。

こうした現代社会にあって、自分自身の生き方や家族とのあり方においてもさまざまな課題を抱え、自らの人生の意味を考え、生きていかなければならない昨今である。

3. 教えにおける「成人」の意味

先述する現代社会にあって「成人」をどのように考えればよいのであろうか。天理教の教えのなかで「成人」はどのように説かれているのかみてみたい。

「おふでさき」に次のお歌がある。

にちへにすむしわかりしむねのうち
せゑぢんしたいみへてくるぞや (ふ六：15)

それよりもむまれたしたハ五分からや
五分五分としてせへぢんをした (ふ六：48)

「おふでさき」の六号15は、「この道を通れば、一日一日と心が澄み、成人するに従って親神の真意が分かるようになってくる」という意味である(『おふでさき註釈』)。また、「せゑぢん」とは、「心の成人の意」と記されている。

「おふでさき」六号48は、「元の理」に関するお歌である。「おふでさき」は、明治2年から15年にかけて教祖が自ら筆を執って第1号から第17号まで1,711首のお歌を書き残されたものである。第6号に関しては主に「たすけづとめ」の理を人々に教えるために「泥海古記」について記されている。ゆえにこのお歌にある「せへぢん」は、親神が人間を創造されたときの人類の成長過程の段階を示されたものである。「成人」に関するお歌を2首事例にあげたが、1つ目のお歌は一人ひとりの心の成人について示されたものであり、2つ目は人類全体に関するお歌であると考えられる。

このほか、「成人」に関する語句は、『稿本天理教教祖伝』、『おさしづ』、『改訂天理教教典』、その他多くのところで見ることができる。これらに示された「成人」の意味は、『改訂天理教事典』(p477～478)に、

一般には、①成年の人。成年以上の人。大人。② adult。人間発育の最後の期たる青年期に続き、心身の発達を終え、一人前(丁年)となったもの。③幼年者の成長すること。大和の言葉としては③の意味で使うことが多い。天理教の用語としては、「心の成人」というように、もっぱら精神的、人格的な成長さらには宗教的な成熟という意味が強い……と記され、主に下線の意味に該当する。

信仰者としては、心の成人が一人ひとりの課題ということになるが、では日々の生活であるいは人生を歩むうえでどのような視点でとらえれば良いのだろうか。

現在のわが国では人生80年の平均寿命であると述べたが、社会には「還暦」を人生の一つの区切りとする考え方が存在する。ゆえに「還暦を迎えて定年」であり、人々も定年を機にあらゆる局面から退くイメージを持っている。

しかし、「おふでさき」に次のようなお歌がある。

しんぢつ心のしだいのこのたすけ
やますしなずによはりなきよふ (ふ三：99)
このたすけ百十五才ぢよみよと
さだめつけたい神の一ぢよ (ふ三：100)
そのちハやまずしなずによはらすに
心したいにいつまでもいよ (ふ四：37)

お歌に示される「ぢよみよ」の意味は、「人間の命に定められている115歳の寿命のこと。」(『改訂天理教事典』p433)である。親神の目から見れば信仰者の我々にとって、60歳の還暦で第一線からリタイアし、その後は余生の人生ではないのである。人間の寿命は115歳が定命であり、命のある限り「生涯現役」の信仰者として、また一人の人間として自らの人生を歩むことが求められているのである。その人生を歩む一人ひとりにとって「成人」は重要な日々の目標でもあり、人生目標なのである。